

第28回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人のものの考え方

今回学ぶこと

日本人のものの考え方といっても、それは時代によっても地域によっても多様なものであり、一概にまとめることはむずかしい。しかし、日本人が長い歴史を通してはぐくんできた、ものの考え方のおおよその傾向というものは考えることができる。世界を「おのずから」な働きとしてとらえる見方や、人との調和を重んじる生き方などはそうしたものといえるであろう。それらを、日本の風土とのかかわりも視野に入れながら見つめ直し、その長所・短所について考える。



講師

田中久文

■ ■ 「おのずから」の世界観 ■ ■

日本人には、「おのずから」というあり方を尊重する世界観があるということは多くの方が指摘している。日本人は結婚式の招待状に、「私たち結婚することになりました」と書く。それは、人間を世界から切り離されたものとみないで、自然全体の大きな流れのなかでみていこうとする考え方である。あるいは、「時流に乗り遅れるな」といった言い方にも、そうした見方は現れているのかもしれない。

『古事記』には、日本の神々は植物が成長するように自然に「成り出でた」と記されている。日本人は神々ばかりでなく、世界全体を「つぎつぎになりゆくいきおい」をもって生成するものと考えていたようである。そして、人間もそうしたものに随順するのが良いのだと考えてきたのである。

■ ■ 「モンスーン」的風土の特色 ■ ■

日本人の「おのずから」の世界観は、日本の「風土」の影響によるものだと考える人もいる。倫理学者の和辻哲郎は『風土』という著作のなかで、世界の風土を、モンスーン型（アジア）、砂漠型（中東）、牧場型（ヨーロッパ）の三種類に分け、そこで暮らす人々の性格は、その風土から影響を受けたものだと考えた。

日本を含めたアジア全体が属するモンスーン型風土においては、湿潤で豊かな自然が人間に大きな恵みを与えてくれるので、そこで暮らす人々は「受容的」になるという。ただし、その豊かな自然は時に行き過ぎて大雨や大風となって大きな災害をもたらす場

合もある。その時には、人間は「忍従的」となって耐えるしかないという。いずれにせよ、そこでは人間は受け身的な性格をもつようになるというのだ。

■ ■ 日本人の人間関係 ■ ■

日本人の人間関係の特色は、人間同士の「和」を重んじることにあるということがよくいわれる。聖徳太子の『十七条憲法』の「和を以て貴しとなす」という言葉は有名である。日本は島国だということもあって、異民族の脅威にさらされたり、数多くの異民族と共存したりするという歴史があまりなかったためではなかろうか。また、農村では「ムラ」という地域共同体で人々が助け合って働いてきた。現代のように機械のない時代では、コメ作りのためには多くの労働力を集約しなければならなかったのである。

こうした「和」を重んじる傾向は、「義理」や「人情」を大切にしたり、他人に対する「恥」というものに特に敏感であるといった国民性にも現れているといえるかもしれない。



◆ コラム ◆

和辻哲郎は、ヨーロッパに留学したときの体験をもとに『風土』を書きました。当時は船旅でしたから、インド洋を渡り、中東の砂漠を海から見ながら、スエズ運河を通過して地中海に入っていました。その航海で見聞したことが『風土』に生かされているのです。和辻は、ヨーロッパには日本のような大きな雑草が生えないとか、地中海は日本の海のような磯の香りがしないといった些細なことに注意して、そこから、「モンsoon」型と「牧場」型の風土の違いという大きな図式を思いつきました。倫理や哲学というものも、本来はそうした身近な体験から出発しなければいけないのでしょうか。